



経済大国の「豊かさ」と 経済成長のコスト

橋本寿朗「戦後の日本経済」
(1995年7月, 岩波新書)

著者は東京大学社会科学研究所を経て、現在、法政大学経済学部教授。今春、当研究所で開催した経済研修では「日本経済論」を講義頂き、その明快な論理と伝法肌な話しぶりは、印象深いものでした。

本書は、敗戦後の廃墟から奇跡的復興を遂げ経済大国となった我が国経済の成長過程を「日本型企業システムの形成過程」と捉え、自らの個人的経験に照らしつつ述べていますが、食生活や農林水産業にも言及されています。

1949年、埼玉県北東部の稲作地帯に生まれた著者にとって、小学校低学年の頃の最も鮮烈な思い出は食事の貧しさと、農繁期に農事手伝いのための休暇があったことだそうです。高度経済成長期に入ると、井戸水汲みの作業と、土間や竈がなくなり、伝統を脱して便利さを求める「戦後日本社会」が農村部にも訪れました。また、りんごや米の品種改良の努力とその成果の普及に触れ、「持続的な品質改善の努力、競争は日本の工業の特徴の一つと

みられているが、工業に限られたことではない」としています。

また、下宿時代には即席ラーメンをよく食べたそうですが、この時代、即席ラーメンが相対的に安くなり味の改善も著しかったことについて、「多数の企業参入、激しい新製品開発、品質向上、価格競争の展開は、後の電卓や産業ロボットでもみられたような戦後日本経済における企業間競争の特徴の1つ」と分析しています。

さて、現代の日本経済について、著者は、豊かさが実感されていないことを問題視し、ガルブレイスの「豊かな私的消費と貧弱な社会的消費・公共サービスとの矛盾」との言葉を引用し生活関連の社会資本整備の立ち後れを指摘しています。さらに、「日本人は世界中から農林水産品を買いまくって」その豊かな私的消費を実現することにより世界に大きな負担をかけている（エビや木材を例示）とし、「日本人の消費の豊かさを十分に認識した上で、国際関係や社会的消費のあり方を考え直すべき時」と主張します。

なお、各国の企業システムは「それぞれに国内で歴史的に蓄積された諸条件の下で合理性の高い経済システム」であり、「主権国家の歴史を刻印された企業システムが国境を無にする活動を展開」しているのが現在のグローバル化の動きであるとしています。しかしながら、求められるべき「新たな世界システムの姿は見えにくい」としています。

(りえぞん No.6, 2001/10/26)

[筆者注：橋本先生は本年1月15日、急性大動脈はく離のため、55歳の若さで急逝されました。謹んでご冥福をお祈りします。]

注：このコラムは、行政部局等と当研究所との間の連携・情報交換の手段として霞が関分室が発行している連絡誌「りえぞん」において、農林水産政策や経済学を考えるヒントとなりそうな書籍や論文の内容を「ほんのわり」だけ紹介することを目的として連載しているものです。